

運動有能感、自己効力感、および運動に対する意識の相対年齢効果

—小学生から大学生までを対象として—

宮島 一菜 (滋賀大学)

1. 目的

本研究の目的は、小学生から大学生までを対象に、運動有能感、自己効力感、および運動に対する意識の相対年齢効果について明らかにすることである。

2. 研究方法

1) 対象者:滋賀県の学校に通う小学3年(男子116名、女子104名)、小学5年(男子99名、女子119名)、中学2年(男子128名、女子103名)、高校2年(男子92名、女子98名)、大学1年(男子109名、女子124名)の計1092名であった。

2) 調査方法:対象者の基本属性、誕生日、運動有能感、自己効力感、運動に対する意識について質問紙により回答を求めた。運動有能感および自己効力感の質問項目は先行研究(岡沢,1996、坂野・東條,1986)の内容を一部改変した計17項目であり、運動有能感は3つの下位因子(身体的有能さの認知、統制感、受容感)、自己効力感は2つの下位因子(行動の積極性、失敗に対する不安)から構成されている。運動に対する意識は、運動の好き嫌いや運動頻度に関する項目であり、計3項目であった。生年月日の分類では、4月から3か月毎で区切ったQ1~Q4と4月から6か月毎で区切ったS1、S2とした。

3) 分析方法:運動有能感および自己効力感の総得点、因子別得点、各項目得点、ならびに運動に対する意識の各項目得点について4群間(Q1~Q4)の差を検討するため、一元配置分散分析を行い、有意差が認められた場合、多重比較検定(Bonferroni法)を行った。また、2群間(S1、S2)の差を検討するためt検定を行った。有意水準は5%とした。

3. 結果と考察

1) 運動有能感の相対年齢効果

運動有能感の総得点は、小5女子(Q1>Q2,Q3)と中2男子(S1>S2)で有意差が認められた。因子別では、「身体的有能さの認知」は大1男子(Q1,Q2,Q3>Q4)、「統制感」は大1男子(Q1,Q2>Q4、

Q1>Q3)、「受容感」は大1男子(S1>S2)で有意差が認められた。運動有能感の相対年齢効果の有無は性および年代により異なり、男子大学生で相対年齢効果の傾向が認められた。

2) 自己効力感の相対年齢効果

自己効力感の総得点は、男女とも全ての年代において4群間に有意差は認められなかったが、2群間では中2女子で有意差が認められた(S1>S2)。因子別では中2女子において「失敗に対する不安」で2群間に有意差が認められた(S1>S2)。自己効力感の相対年齢効果の有無も性および年代で異なり、中学生女子でわずかに見られた。また、中学生女子の自己効力感における相対年齢効果は主に「失敗に対する不安」因子が影響していると考えられた。

3) 運動に対する意識の相対年齢効果

「運動が好き」と「体育が好き」、および「運動に対する意識」では、中2男子(S1>S2)で有意差が認められた。中学2年生を対象とした先行研究において、早生まれは「消極的である」など心理的側面に相対年齢効果が見られるため、中学の年代の男子にて運動に対する意識にも相対年齢効果が見られたのかもしれない。しかし、2群間の差であることから運動に対する意識についても明確な相対年齢効果があるとは言えないだろう。

4. 結論

本研究では、一部の年代と性で相対年齢効果は見られたが、小学生から大学生にかけて相対年齢効果の一定の傾向は見られなかった。また、有意差が見られた部分でも2群間(S1、S2)の差であったため、運動有能感、自己効力感、および運動に対する意識の相対年齢効果は強い傾向とは言えないと推察された。

5. 主な参考文献

1) 中田大貴(2021)スポーツにおける早生まれの成長格差,日本発育発達学会編,19(3):188-192.